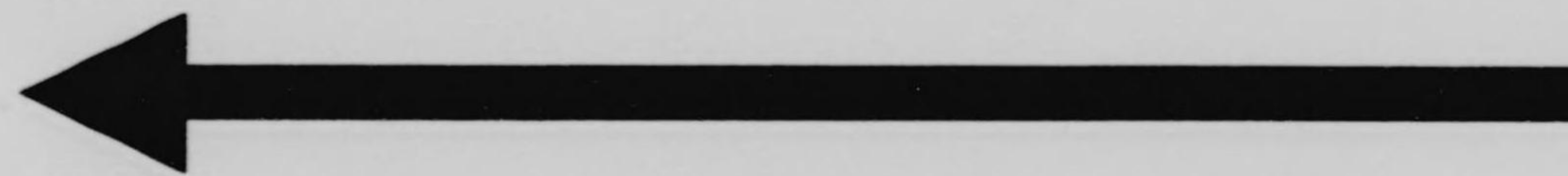


372

282

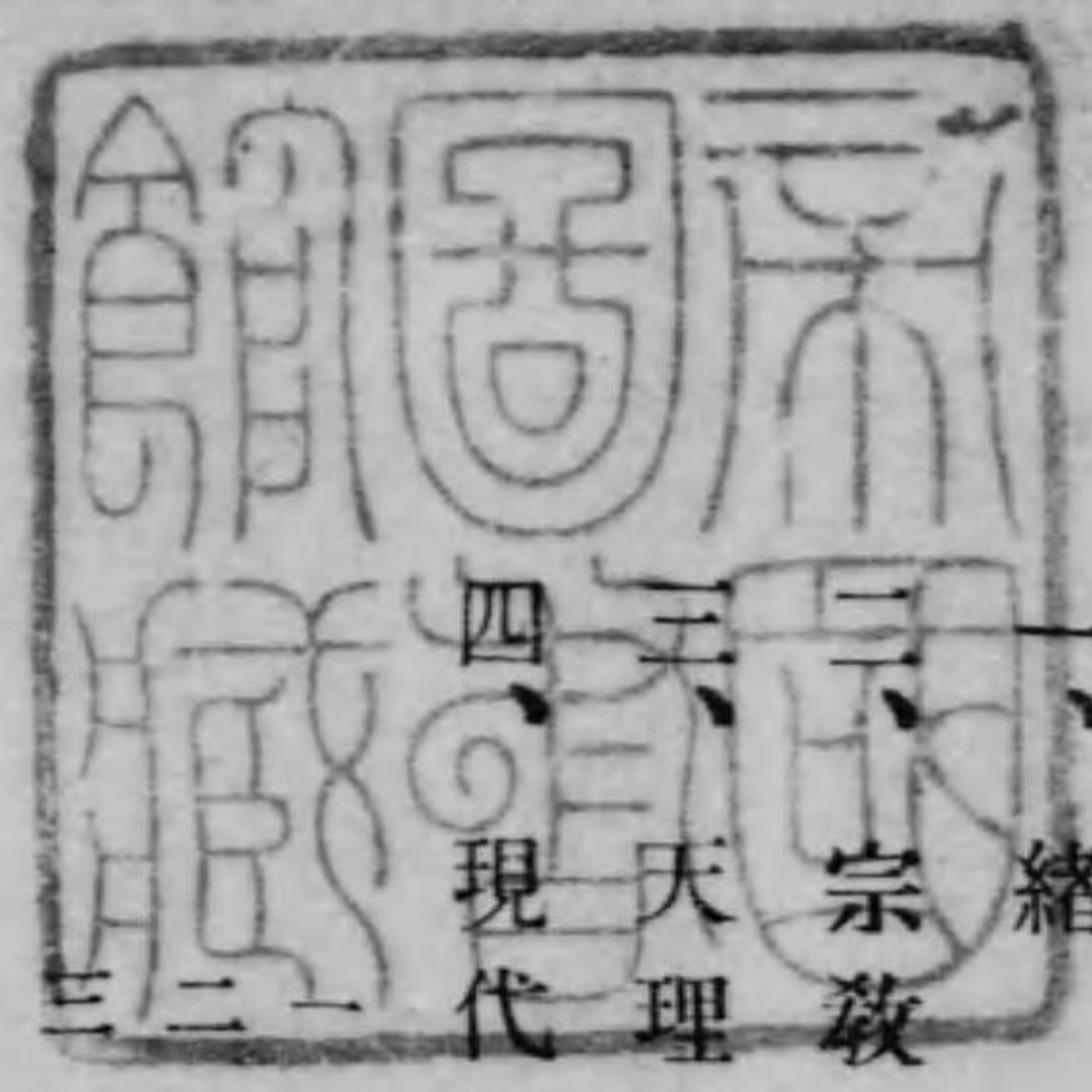


始



天理教と現代思想

372-282



緒言

一、宗教家招待

二、天理教と我日本帝國

三、現代思想

四、現代思想

一、社會主義

二、過激主義

三、民主主義

五、現代思想と天理教教理の一端

六、結論

目次

頁	行	誤	正
三	六	カーネギー	カーネギー
四	二	カーネギー	カーネギー
五	一	デモクラシー	デモクラシー
十八	七	陶治	陶治
十八	一〇	彼比	彼此
二十二	二	指導せられてゐるとは	せられてゐることは
二十二	九	多く	多と
二十六	二	根本の問題であるを	あると
二十七	一	最後を遂げられたれ	最後を遂げられた
二十八	四、五	亡んでしまつた	亡んでしまつた
二十八	九	獨立せる權利	獨立せる權利主体
三十三	七	然らねばならぬ	然らねばならぬ
三十三	八	國際聯盟	國際聯盟
三十四	八	それと	それを
三十五	四	今まではからにや	にを削る
三十七	三	邊なく中にも	中には
四十	八	主義社會	社會主義
四十一	八	Industrial	Industrial
四十三	一〇	名稱から	名稱から
四十五	二	デモクラシー	デモクラシー
五十一	二	デモクラシー	デモクラシー
五十一	五	教育上のデモシー	デモクラシー
五十三	一	Government for people	Government for people
五十五	九	不平等なる	不平等となる
五十八	一二	神の方にはばのいの	のを削る
七十三	一〇	調	端

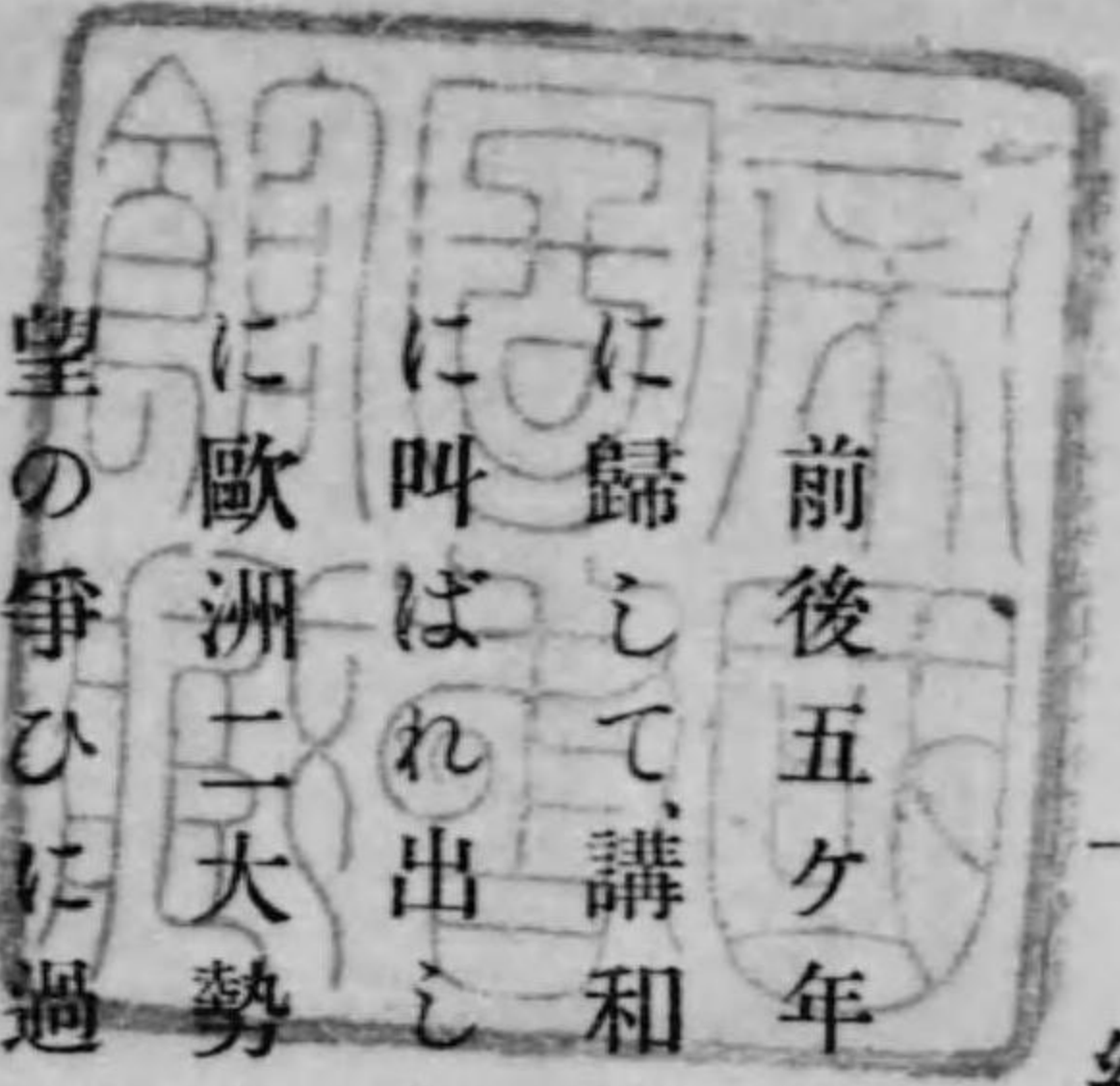
寄贈本

大正
8. 8. 18
寄贈

天理教と現代思想

一、緒言

前後五ヶ年間に互れる今次の世界的大戰は、竟に獨逸の敗北に歸して、講和條約調印の餘儀なきに至り、茲に平和の歡は一聲に叫ばれ出したのである。而してこの世界的大戰争は、要するに歐洲二大勢力の間に起れる覇權の争、換言すれば國際的の欲望の争ひに過ぎない。限りなき欲望の禍心は、互に國力を糜爛し、文明を破壊し、遂に人類の滅絶を見ずんば止まざらむとする形勢を呈し、人をして坐ろに戰慄の感を起さしめた。然るに米國が參戰するに及んで、彼は宣言して曰く、吾等は土地を望むも



二
のではない、又敢て賠償を欲するのでもない、吾等は又獨逸國民
と戦ふのではない、獨逸の暴政即ち侵略的軍國主義を倒さんが
爲めに起つたのである。若し此の戦争にして、假りに獨逸が勝
利を博したとすれば、則ち正義の聲が滅して、軍國主義、專制主義
の力が世界を統御するに相違ない。さすれば自由は此の時に
至つて亡んでしまふのである。故に吾等は自由の爲めに奮然
として戦ふのであると高唱したので、その聲が則ち世界に響き
渡つたのである。さればこれが必然の成行として、國際聯盟(*Ligue of Nation*)が米大統領ウイルソン氏によりて提唱せられる
事となつたのも敢て不思議ではない。氏は講和會議の初日に、
吾人は正義と公平と自由と平等との原理に基いて國際聯盟を
完成せねばならぬと力説した。多くの強國代表者は悉くウ氏

の永遠の平和を築き上ぐべく提唱したる國際聯盟の意義ある
ことを稱賛し、各々最善の努力を盡さんと唱導した。所謂世界
改造の鐘はこの時より鳴り響いたのである。元來米國が永久
平和を支持する手段として、常に懐いて居つた考は、前述の國際
聯盟と今一つ國際民主主義(*International Democracy*)と稱するもの
がある。この國際民主主義はカーネギー、ルート氏等によりて
夙に唱へられてゐる處で、要は世界の各國が皆共和國にならね
ば、永久平和を望む事が出来ないとの主張であるが、元來君主國
であるから戦争をし、共和國であるから戦争をしないとの議論
は、既にその前提に於て誤つてゐる。戦争と國体とは其處に何
等の必然的關係はないのである。現に君主國たる我が日本帝
國を始めとし、英國にしても、伊太利にしても、君主の名譽心の爲

めに戦争を惹起するといふやうな事は、全然あり得べからざる事である。偶々ルート氏やカーネーギ氏等は、自分が共和国に生れてゐるが爲めに、かゝる偏見に囚へられたので、理論として、も實際として、誤謬であり、不可能事であるが故に、この主義にはあまりに重きを置く者はないのである。然し乍ら正義人道に基いて永久平和を確立せんとする國際聯盟問題に至りては、各國共に之を歓迎し、聯盟に加入せんことを希望してゐる。之を以てしても如何に世界が眞の平和を憧憬してゐるかが知られるのである。

顧みて我が日本の現状を想ふに、今や世界の大战を背景として、國民の思想が世界の思想界と全面に於て接觸し、互に兩者の間に相通するやうになつた感もある一致(Union)自由(Freedom)協

同(Cooperation)平等(Equality)デモクラシー(Democracy)といふやうな世界的思想は、容赦なく國民の全生活と交渉して、益々その浸潤を深からしめる様にも思はれる。加ふるに戦争が齎せる經濟界の變動は、延いて物價の昂騰となつて、國民生活の根柢を劫し、一方致富者の驕傲なる態度は、反つて細民の反感を買ひ、遂に大正の不祥事件さへ勃發せしめた。而して國民の一般的自覺は、外來の思想と相待つて思想界に大なる動搖を與へた。搗て加へて、露獨の革命思想も流れて來てゐる、従つて所謂危險思想なるものも、戦前よりは遙かに大なる勢力を以て一部國民の精神界に注入せられんとする傾向あるのみならず、最近の新聞は吾人に驚くべき事例を示すことすらある。

又近來各種思想に關する刊行物の賣行が非常に盛んになつ

た事は實に驚くべきで、あらゆる階級に向つて日夜滔々として
傳播せられつゝある結果は、多少文字ある者は、談話に辯論に或
は勞働問題、或は民主主義、或は救濟問題等種々なる社會問題を
研究論議し、以て言論界を賑はしてゐる。然も正當なる理解に
より、我國家の現在と將來とを想ひ國體と相容れざる惡思想は
之を排除するも、取るべきは採りて、以て同化融合し得るに於て
は、大に歡迎すべき所があるかも知れないが、さもなくして徒ら
に之にかぶれ、以て從來の社會制度を破壊し、若くは不平者を驅
りて煽動するが如き方法に出づるに於ては、寒心すべき一大事
といはねばならぬ。更に近時學生界にも此風潮漸く盛んにし
て、往々不穩なる言動に出づるものがある。其他頻々として發
する工場の示威的運動、乃至は學校騒動、近くは本年三月朝鮮に

於ける暴動も、畢竟するにその背後には、時代思想の影響が、少か
らず潜在してゐるのである。かくの如く時代思想が全國を風
靡してゐる今日、國民たる者は冷靜に考慮し、深き國民的自覺の
下に、その歸趨を誤らぬやうせねばならぬ。更に想ふに、我が天
理教の使命は、教祖の天啓に基いて世界人類の救濟を本願とし、
神の御國を地球上に建設せんとするにあるは、今更論を俟たな
いのである。然も教祖は今次の戦争と思想界の混亂とを既に
早く豫言し給ひて、以て我ら教徒の天分に邁進奮闘すべきを示
されてある。されば吾が天理教に於ては社會の現狀に鑑み、教
祖の遺訓を奉戴して、正に大活動に出でんとするに際し、内務大
臣の宗教家懇談會に接したれば、これを機縁とし、神意の存する
所に向つて大に努力し、以て本教の立場を明かにしたいと思ふ。

二、宗教家招待

八

思想に國境なしとは、古くより言ひ慣はした言葉である。然も最近科學の發達につれ米國より發した飛行機は僅か十六時間で英國に著いたと言ふし、飛行船が三日かゝれば、倫敦より喜望峰に一飛が出来るといふ。獨逸沿岸の無線電信局の打電が八千哩の此方、日本の無線電信機に感受して、ウイルソンとカイゼルとの打合が拾貳分に知悉せられて、帝國の施設に少からぬ便宜を與へたといふ今日、考へて見れば、大地球も人智によりて餘程縮少せられたかの感が起る。此調子を以て世界の新思想は、間斷なく歐米の彼方より押寄せてくる。所謂社會主義(Socialism)個人主義(Individualism)無政府主義(Anarchism)共產主義(Communism)

過激主義(Bolshevism)民主主義(Democracy)經濟上に於ける、サンヂカリズム(Syndicalism)職工組合(Trade Union)等一々之を枚擧するに遑がない程である。然も滔々として流れ來るこれら新思潮は漸く國民の心裡に侵潤してその歸趨を誤らしめ、思想界の大混亂を惹起せしむるに至るのではあるまいかと思はしめるものがある。此を以て政府當局者は、時代思想の惡弊を矯正し、民心の歸向する處を知らしむるを根本政策とし、あらゆる方法を講ずると共に、曩には文藝家を招待して、懇談する處ありしが、這回又床次内務大臣は、精神界に勢力を有する各宗教家を本年五月二十四日その官邸に招待し、思想問題と、戦後民力涵養問題とを談議する爲め懇談會を開催せられた。當時内務大臣は本教管長に對しても

九

一〇
拜啓時下彌御清穆奉賀候陳者戰後民力の涵養と國民思想問題に關し愚見のある所をも御聽に達し且つ御高説をも拜聽致度候に付御繁務中御迷惑の義とは存候へ共來る五月二十四日午前拾時を期し東京市麴町區霞が關内務大臣官邸へ御光來被下度右得貴意候 敬具

大正八年五月九日

内務大臣 床次竹二郎

中山正善殿

ごいふ招待状を送附して來た。本教に於ても豫て思想善導の問題については、深く注意し、早晚これが實行に出でんごする際、かゝる招待に接したのであるから、直ちに幹事松村權大教正を管長代理として出席せしむる事ごした。かくて、その招待會

は豫定の如く五月二十四日午前拾時、内務大臣官邸に開催せられしが、神佛耶の代表者總て七十有五名の出席者があつた。政府側からは、床次大臣を始めごし、小橋内務次官、添田地方局長、潮衛生局長、其の他文部省の柴田宗教局長、陸軍省の村岡少將、海軍省の下村少將、遞信省の奏次官等ご共に着席し、内相は大要次の如き談話を試みられた。

今度の大戰以來各國民心の緊張してゐる有様並にその努力の偉大なることを見ては、如何にも心持ちよく感ずるご共に、我々日本國民も亦大いに覺悟せねばならぬこと感ずるのであります。將さに宇内一新せんごする今日に當り、之れに應ずる對策を講じて、依つて以て彌々我國運を伸張せねばならぬごいふ事は、何人も恐らく同感の事ご存じます。従つて

斯る諸物一新せる内に於いて、私が特に感を深う致しまする事が三つあります。其の第一は別段事新らしい事でもありませんが、國の富國の強さといふ事は、如何にも國民一人々々の力が強くなければならぬといふ事であります。而して國民各自の性格を十分訓練し、發達せしめねば、國は強くなならないのであります。

次に感じました事は、國家に對する觀念が非常に強くなつて來た事である、今度の戦争が始まりました當時、佛國大統領ポアンカレ氏が出した布告なるもの、中に、今や吾々は國家の大事に遭遇してゐる、一個人の生命財産を顧る暇が無いといふ様な言葉があつた様に記憶して居りますが、此の觀念は終始一貫して今日に參つたのであります。併し是れは、獨

り佛國ばかりではなく、各國みなその通りでありまして、戦争中にも、同盟罷業が起りましたけれども、かう云ふ事はよしやお互の申合せであつても、國家の大事には換へられないと考へて、此の同盟罷業もやめた、國家あつての生命財産である。自由平等も絶対の自由ではない。國家あつての自由平等であつて、其の自由平等も初めて適切に行はるるものであるといふ國家觀念が非常に強くなつたやうに思ひます。今一つは正義公道を重んずる考で、苟も世界の正義公道を重んじなければ、國際聯盟の力を以て、之を懲すといふ考が熾烈になつて來た事であると思ひます。

かういふ風に、私は三つの事を切に感するのでありますが、國家ご申しましても、固より一つではない、強弱大小夫々の相違

一四
がある。又政体が異つて居る。丁度人間ご申しましても、男があれば女もある、老人もあれば子供もある、強いものも弱いものもある、而して此等のものが各其の特長を發揮して其能を盡すと云ふ上に於ては、各自尊の心がなければならぬ。此の自尊の心がありて、社會共存の道理が働くのであります。之れと同じく一口に國家ご云つても、色々に違つてゐる、其の違つて居る國家が各々其の特長を備へ、其の使命を發揮するのみならず、正義公道を重んずるに依つて、其の平和ご云ふものが出来るのである、されば個人ごしては、其の性を盡し、其の能を揮ひ、國民ごしては、國家に對する自尊心ご云ふものがなければならぬ。米國民は米國を以て、世界第一等の國であるごいふ自尊心を持つて居る。英國人は英國が世界の霸王で

あるこの自負心を持つてゐる。これは國民ごしては、さもあらべき筈である。此の意味に於て言ふと、我が國の如きは、三千年の古き歴史を有し、世界無比の皇統を戴き、立國の抑もから道義を以て國を建て、三種の神器即ち三徳を備へて居る國柄であるから、其の國体や實に堂々たるものであります、決して新しい力で俄かに出來上つた國の人々が考へてゐるやうなものではない。如何に世の中が進んでも、此の點に於て我が國は實に立派なものであつて、我々國民は日本人ごして世界に立つに當り、十分自負してよろしい譯であります。又我が國の現在の地位から考へても、今日東洋の平和を維持したのは、是れ全く日本人の力である、其の間に於ける日本の努力は容易ならぬものである、又東洋の先進國ごしては、東西文化

の要樞に位し世界の文運に貢献すべき絶好の地位を占めて居るのでありますから、此に日本人たる事を愉快に感ずるのであります。形は日本服が洋服になつたり、下駄が靴になつたり、チヨン鬘が散髪になつたりして、昔と今とは變つてゐるが、然しながら此の黄色を變ることが出来るか、お互の血管に流れてゐる血を變ることが出来るか、況んや精神までも歐米人同様に變へる事は出来ないのであります。國家として見ても、様々の相違があつて一様には参りませんので、政体にも夫々の相違がある、其の相違のある所に妙味がある、互の長所を發揮する所に使命もあると感ずるのであります。されば此等の觀念を彌々發揮して行き而して又國民として個人として、固陋に流れず偏狹に失せず採るべきは採り、捨つべき

は捨て、所謂新たなる修養を積み、彼此共済の實を擧ぐるなり、又は勤儉力行の美風を起すなりして、以て十分個人の人格の修養發展に努力する事あらば今後日本國民として、世界に處して行くに最もよろしからうと信ずるのであります、それでは今後なす事も澤山ある事と思ひますが、先づ前述の三者に深く感ずる所があつたので、民力涵養の方面より着眼して、五大綱要を掲げて、この方面に盡したいと思ふたのでありますから、どうか諸君は宗教家として、宗教の立場から國家の爲め御盡力を御願ひしたいのであります。述べ、尙ほ又、我が國の社會問題にも言及し、貧富の懸隔、労働者の問題より特殊部落の改善指導等に就いて特に宗教家の努力、後援を乞ふ旨を談せられた。

そこで内相が云はれた五大綱要ごいふのは、ごういふ綱目であるかごいふに、それは、本年三月一日附を以て各道府縣長官に對して發せられた内務省令第九十四號中に掲げられてあるので、即ちさの如きである。

- (一) 立國の大義を闡明し、國體の精華を發揚して健全なる國家觀念を養成すること
- (二) 立憲思想を明瞭にし、自治の觀念を陶冶して公共心を涵養し犠牲の精神を旺盛ならしむること。
- (三) 世界の氣勢に順應して銳意日新の修養を積ましむること。
- (四) 相互諧和して彼此共濟の實を擧げしめ、以て輕進妄作の憾なからしむること。
- (五) 勤儉力行の美風を作興し、生産の資金を増殖して生活の安定を期せしむること。

定を期せしむること。
 尙ほ同日午後三時半、原首相からも宗教家諸氏をその官邸に招待せられ、そのみならず、引續きて翌二十五日午前は芝三縁亭に於て、中橋文相、午後五時よりは小石川後樂園に於て、田中陸相の招待があり、兩大臣も亦左の如く挨拶をかねたる依頼があったのである。

中橋文相の就任披露挨拶

昨年就職以來一度御招きしまして、就任の御披露を申上げ、且つ態々御訪問下さいました方々に對し、御禮も申上げたいと考へて居りましたが、遠方に御出での御方も多く、自分も亦其の機會を得なかつたことを甚だ遺憾に存じて居りました。

所が、今回は内務大臣の御招きに依り、御集會の事を聞きまされたので、之を幸機として急に御出を願た様な次第であります。斯く多數御出席下さいましたことは、詢に光榮の至りでありまして、此の機會に一言御挨拶を申し上げます。

今回の歐洲の大亂に依り、露國が先づ崩壊し、獨國敗れ、軍閥政府の下に侵略を策したものは、皆悉く革命の大慘劇を演ずるに至つたのであります。之は多年覇道を稱へて專制壓迫を事とした一大反動の出現であつて、全く自然の勢に外ならんのであります。然るに我國は幸にして三千年來王道に基づき、上下一致以て今日の如き國運の隆盛を來たしたのであります。恂に御同慶の至りに堪へません。之れ固より諸君の如き徳高く、識廣き世の先覺者の御盡力に依ることが最も多

いことは言ふまでもない次第であります。去りながら、方今萬國比隣の如く、交通頻繁の時に於ては、時として、コレラ、ペスト、或は世界風と云ふやうな悪疫の襲來することも、恂に勢ひ已むを得ない次第であつて、之に對しては進歩した醫術を以て防遏に努め、治療の術を盡すやうに、精神界、思想界に於ても亦時に變態な各種の思想が到來浸入することのあるのも自然の情勢でありまして、之に對しては諸君の如き一世の先覺たる有徳の士が、其の防遏治療の任に當つて頂かなければならぬことは勿論のことです。然し外來思想の輸入は大に歓迎すべきものであります。即ち各種の思想の輸入到來は、以て思想界の向上進歩を誘起するもので、極めて必要なことは申すまでもありません。要は只其の善きものを取り悪

しきものを捨つるのであります。此の趣旨に依り常に國民を指導せられてゐることは、萬々遺憾なきところは信じます。此の機會に於て一言希望を申述べる次第であります。云々

二三

田中陸相の挨拶

各位は從來本務の繁忙を顧みず、軍隊の布教に將又這次西伯利亞出兵に對しては、酷寒を厭はず萬里の長程を踏破して僻陬の地に至るまで、出征將士の慰問に御盡力下されたことは、我が陸軍に代りて衷心感謝の意を表しますと共に、各位の勞を多くする所であります。

今や全世界を震撼し、史上に未だ類例を見なかつた大戦は、漸く終熄して將に平和の域に入らうとすつてあります。則ち

砲煙彈雨の悲惨なる戦争は已に終りましたが、各種思想界の濁流は滾々として、世道人心を浸潤し、吾人をしてその歸する所を知らしめないであります。申すまでもなく思想界の大戦争は、今後に於ける世界の一大問題でありまして、我が國に於ても重大な關係を有するのであります。然も世界の大部を支配する民主主義、及歐洲の一隅に起れる過激主義等を奉ずるの徒が、我國民思想を攪亂せんと企圖して着々之が宣傳を試みつゝあるは、諸種の情況によりて、殆ど疑ふべからざる事實であります。されば現今我が國の思想界は、空前の危機に瀕しつゝありといふも敢て過言ではありません。此の時に際し、精神界の樞軸となり、國民思想教化の任に當られる各位と親しく會して互に意見を交換するの機會を得たるは、予

二三

の衷心欣幸とする所であります。

翻つて我陸軍兵役の制度は、各位の既に業に御承知せられるが如く、特種の兵科を除くの外は、在營期間僅に二年にして、然も郷閭にありて兵役に服する期間は頗る長く、又年々徴集せられて、親しく軍隊教育を受くる者は、その壯丁の一部に過ぎずして、他は所謂在郷軍人であります。此の數實に二百八十萬これ等在郷軍人は、平時に在りては國民精神の中樞となり、國家有時の秋に際しては、軍國の骨幹たるべきものであります。から、在郷軍人の精神の健否は、實に軍國の消長に甚大なる關係を有つてゐるものであります。精銳なる武器も、その活用する人の如何によりては、死物と何等異なる處がありません。如何に巧緻の器械を具ふる軍隊にありましても、特に

軍人唯一の武器たる精神に缺陷がありましたならば、戦勝は到底望む事が出来ないのであります。乃ち軍人精神の振否は、平時戦時を問はず、國家並に國軍の盛衰に影響する所頗る大なるものがあります上に、思想界の敵に對する戦争は、絶えず健全なる思思を以て、奮闘すべきは言を俟たないのであります。

刻下の情勢叙上の如くでありますから、各位に於かれては、此の精神界の情況に鑑み、一般布教の際と雖も、特に在郷軍人に對する精神思想の教化指導に就いて、格段の御高配と、御盡力を切望願ひして止まぬ次第であります云々。

以上三大臣の懇談希望せられし要領は、多少異つてゐる處があるが、約る所は健全なる國家觀念の養成と、國民精神の善導と

にあるは云ふまでもない。別けて内務大臣の懇望せられたる健全なる國家觀念の養成は、その尤も根本の問題であるを思ふから、聊かこれに關する教義的説明を試み、順次思想問題の解決に言及したいと思ふのである。

三、天理教と我日本帝國

希臘の哲人アリストートルは「人間は國家のない所に於ては。神が然らざれば、獸類である」といふた。眞に至言といはねばならぬ。人類の長き歴史は要するに現今の國家組織に導く連續的の過程であつた。吾人は國家の下に自己の生命と財産と自由とを保障せられる事に依て、始めて幸福なる生を享受しつゝ、あるので、若しも國家なからんか、アリストートルの所謂神か、然

らざれば獸類たるを免れない。然も吾人は到底神たるを能はずとせば、須く獸類の生活に甘んじなければならぬ事になる。これ何人も欲せざる所、此を以て國家の發達隆盛を企圖するは、やがて又人類の進歩幸福を望むことになるのである。吾等日本國民は幸に聖徳深き列皇の下に光榮ある國民的持續をなし來り、猶且永遠の未來に向つて。意義ある生命の繼續をなさんとするものであるから、當に我が帝國の隆盛と發展とを衷心より圖るばかりではなく、積極的行動に邁進して、愈々國體の尊嚴とその精華との發揮に向つて奮勵努力せねばならぬ。

今次の戦争は一面に於て歐洲君主國の滅亡を示した。即ち露西亞は過激的思想の革命により、三百年間打續いたロマノフ朝を倒し、その皇帝、皇后其の一族は、悲慘なる最後を遂げられた

獨逸のカイゼルは、一時非常なる權力の下に侵略を恣にせんごしたが、一度挫折して失位するや、獨逸帝國や二十三の君主國は一朝にして共和政体となつたと傳へられてゐる。奧匈國亦然り、彼のオットマン帝國たる土耳其も事實上國家が亡んでしまつた。然るに獨り我が帝國のみが儼然として唯一無二の君主國體を世界に誇る所以の者は、抑々何に基くのであらうか、いふまでもなく歐洲のそれとは建國の根本に於いて大なる差別があるからである。外國の君主制は二元主義の上に立てゐる。即ち君主は獨立せる權利であると共に、人民も亦獨立の權利の主体とせられてあるから、勢ひ利害關係を異にする權利の各主體が相争ふは當然である。此を以て止むを得ず君主と人民との間に協定せる憲法を立て、久しく立憲政治を行つて來たのである。

るが、前述の世界的思潮の爲めに脆くも民主々義に打ち負けてしまつたのである。然るに我が日本帝國は、一元主義の國家組織であつて、上天皇と下臣民とは利害關係を異にしないといふのがその特色である。即ち開闢以來代々の天皇は仁慈を以て國家統治の大本とせられ、我等臣民を「おほみたから」と稱し給ひて、恰も慈母の赤子に於けるが如く撫で治め給ひしかば、我等臣民亦神統を垂れ給へる代々の天皇に對し奉り、赤子の慈母を慕ふが如くなつき従ひまつり來たのである。謂はゆる君臣の義に父子の情を兼ねるといふのが我が國体の萬國に冠絶せる所以である。この大義を知らずして、露國は崩壞し、獨逸皇帝亦倒れたと云ふ事に依つてこの影響がやがて日本にも及ぼすことありはしまいかと、頻りに憂ふものがあるが、決して虞れるに

及ばない。要は日本人が天皇を中心として、國家の鞏固を計るごいふところが、やがて國家の生存、國民の生存であるこの深き自覺を以て、日本特有の國體を維持し以て國體の精華を十二分に發揮する事に努めるのが最も肝要である。然して此等に關する實際は、歴史、法制の示す處なれば、敢て茲に之を呶々するの要はない。唯吾人は我天理教が如何に日本の國家に對して徹底せる教理を有するか、教祖は如何に日本の將來に向つて豫言せられたるかに就いて、天理教の我が日本國家觀を詳述したいと思ふ。

我が教祖は日本と外國との關係を一本の木に譬へて、日本はその根であり、外國はその枝葉であることを説かれた。そして我々國民は、亦世界の最上首國にあつて、根の國の榮を現はすべ

く特別の神意より、元なる根の國に止め置かれたるものごせられてある。而して日本が既に根の國であるからには、當に根の國としての使命がなければならぬ筈である。即ち世界の發達も要するに是の根より生ずるものでなければ、眞正のものご見ることが出来ない。根の力の減退は同時に枝葉の枯るべき時であることを説かれてある。それ故に世界の平和を求めんとするのには、如何にしても日本の根をば益々鞏固にせぬばならぬ。換言すれば日本を基礎として樹立したる眞實の方法にあらざれば眞の平和を望むことが出来ないごいふのが教祖の大理想である。世界的平和の聲を耳にする今日、我等天理教徒の責任も亦重且つ大なりごいはねばならぬ。

「日本見よ小さいやうにおもたれご根があらはれば恐れいる

ぞや」

「枝先は大きに見えてあかんものかまへは折れる先を見て居よ」
「元なるは小さい様で根がねらいごの様の事も元を知るなり」
「同じ木の根と枝との事ならば枝は折れくる根は榮ね出る」
「今まではからがねらいごいふたれごこれから先きは折れるばかりや」

然り而して日本の根の國に對して、枝葉に當る外國に先づ美はしき花咲き、瑞々しき實の熟するは言葉を換へて云へば、外國が日本に比して、物質文明の既に早く發達せるは、因縁の理の然らしむる處であるけれども、枝葉の華美は決して永久的のものではない、榮ねる春があれば衰へる秋が来る、そしてその枝葉はやがて根の肥料となるが理の當然である。是れ日本の過去の歴史

が實證してある。現に外國の文明が朝に夕に輸入せられつゝ、あるが皆此等は日本に於て消化せられ、吸収せられ、やがては美花となり、良實となつて、遂には日本から外國へ輸出せねばならぬ時が来るに相違ない。否な將に來らんごしつゝ、あるのである、日本と支那との關係の如き正に其の一例である。是れ必竟根の働きであつて、現時外國が日本より才能が進歩して、夙く文明を形成せるのも、亦枝葉の國として然らねばならぬ因縁である。教祖はこれを

「これまではからやごいふてはびこりてこれも月日が教へ來るで」
と預言せられしこの神意深く省慮せねばならぬ。

然るに動もすればこの本末の關係を疎外し、日本よりも外國が勝れてる國であるかの如く思惟し、何事でも外國を振り廻さ

ねば治りがつかぬもののやうに考へ、自ら卑下して日本自體の尊い因縁から遠ざからうとしてゐる人々は、思はぬも甚だしい。云はねばならぬ。かくの如く日本と外國との本來の因縁を打ち忘れて、互に交つてゐては、世界治まる「日」は永遠に見る事が出来ない。兄は兄の理を守り、弟は弟の理を守つてこそ、始めて一家の圓滿を得られるが如く、世界各國をして、亦其の地位を眞に自覺せしむるに非ざれば、所謂世界の永久平和を求むる事が不可能である。この點より見て、這回の際國聯盟に基く永遠の平和は、甚だ疑はしいものごいはねばならぬ。そこで、教祖は「唐人と日本のものご分けるのは火と水とを入れて分けるで」

「眞實に掃除をしたる其の後は神一條で心勇むる」

ご豫言せられてある。然も其の當時にあつては、殆んどこの神意を揣かることが出来なかつたが、日清、日露、日獨の戦争によつて、その宏遠なる思召の程が實現せられ、根幹枝葉の關係漸く歴然たるに至つて始めてそれご窺ふことが出来た。然し乍ら神の期待し給ふ理想から見れば、現在の日本の發展の如きは、まだ、その十分一にも達して居ない。問題は主として今後に起て来るべきである。此に於て吾々は智力に於て實力に於て充分彼等の上に立つただけの大なる覺悟と根たる日本國民の自覺を必要とする。由來本教を目して病氣たすけの祈禱教の如く思つてゐる者がある。されど、教祖の理想は決して身上救濟ばかりではない、即ち世界の平和を實現せしむべく根の國たる日本の強盛を第一に望まれたのである。

「高山の日本のものご唐人ご分けるもやうも之れも柱や」

ご仰せられしを見ても如何にこの實現者ごしての大人物の出現を期待し給ふたかを知ることが出来る。されば吾人は飽く迄もこの期待に背かざる様勇往邁進して眞實の道の開拓に努力せねばならぬ。かくして日本にこの眞實の道が廣がり、神が日本に對して特別の恩寵を下して、引き立てられるに至らば、外國が如何に暴慢なる態度に出でくも、日本は常勝の地位に立つて、彼等を教化することが出来る。それを又教祖は

「何んにても神一條を知りたならからにまけそな事はないぞや」

ご仰せられてある。尙又日本の將來を祝福して

「此の先きはなんぼからやご云ふたごて日本がまけるためし

ないぞや」

「日本には今迄何を知らいでもこれから先の道をたのしめ」

「今まではからにや日本ご云うたれごこれから先は日本ばかりや」

「だん／＼ご何事にて日本には知らん事をばないごいふやうに」

「だん／＼ごよろづたすけを皆をしへからご日本を分けるはかりや」

ご仰せられてある。即ち、教祖の日本帝國の將來に關する以上の預言は、また同時に我が建國當初の大理想であることは、古來國民の思想に傳はつてゐる處である。之を要するに我か教の日本國に關する教義は、我が日本は根本の國にして、我等臣民

はその根本人種であるといふことになるのである。それ故に世界一列を救済すべき我が天理教がこの根本の日本の國に發生し人種の根元たる我が日本國民をして、此救済の大任に當らしめんごせきこまれたのは、深き神意の存する所である。さても我等國民は天祐を保有し給へる萬世一系の天皇を奉戴し、世々至大至甚の皇恩に浴しつゝ漸次に進歩發展をなし、戦へば勝ち勝てば必ず光輝を歴史に止め、神意のある所着々として實現せらるゝ事實を目撃し、神恩の無窮なる國土に生を享けつゝあるのは、無上の幸福であつて、即よき因縁の然らしめた所と深くこれを感じ感謝すると共に、特に吾等教徒としては、徹頭徹尾天啓の教に信順しこの教條に相容れざる外來の思想に惑溺する事なく、如上の立國の大義と神命附託の大任とを體し、絶大なる神の

威徳に信頼して教祖預言の實現を期し、世界救済者たるの使命を自覺して、發奮努力以て神恩皇恩に報い奉る心行一致の舉に出でんことを覺悟せねばならぬ。

四、現代思想

天理教と我が日本帝國との教理上の關係は、前述の如く頗る直截明白であつて、何等の疑義を挿む餘地はないのである。而して又教祖は今次の世界的戦亂の到底避くべからざることをも預言せられて「焔硝箱に火をつけたやうな日が來るで」と仰せられた。勿論御預言當時にあつては、その何たる意義であるかは人々の了解に苦む處であつたが、今日その實現に接するに及んで神意の宏大深遠なるに唯々驚くのほかはないのである。

尙又これに關聯して「世界が日本を攻めにくる日もある」と諭された神言がある。こは正しく文字の示すが如くに、世界が兵火を執つて日本を攻略すべきを預言せられたものと解すべきであらうか。否々正義と眞實とを國是とせる根本の親國に對し、枝葉の國が攻略的態度に出づべしとは、信ずべからざる事である。然らば何を寓意せられたかといふに、吾人は今日の思想界の混亂を控へて考ふるべきに思ひあたることがある。近時滔々として侵入せる外來の思想は之を應接するに違なく、中にも危險的性質を帯びたる各種の思想も亦此の間に傳はり來つて、その浸潤的勢力の甚だ恐るべきものがある。然もこの儘にして世の風潮に任せんか、遂には救ふべからざるの危急時に遭遇する事あるかもしれない。これを未然に防遏せんがため、今次

政府當局は宗教家を招待して、又その力に依らんさせられたのであるが、その所謂危險思想、時代思想とは如何なる性質のものなるか、先づ以て大体の傾向を知りおく必要があると思ふ、そこで各種思想中尤も大なる潮流をなしてゐるもの三者を代表してその概要を説明し、併せてこれが批判をも加へたいと思ふ、その三者とは即ち(一)社會主義(二)過激主義(三)民主主義、即ちこれである。

(一) 主義社會 (Socialism)

抑々社會主義は近世に於ける私有財産制、及び産業上の自由競争より必然的に生じたる資本家と勞働者、若くは貧者と富者との懸隔を矯正せんことを目的として發達したるもので、廣狹

種々なる意義が含まれてゐる、その最も廣い用例は個人的活動をして社會公共の目的に對して従位たらしめんとする一切の傾向をいふのであつて、此の意義に従へば教育上に於ける社會的教育倫理上に於ける社會的倫理學、經濟上に於ける社會經濟學、國家社會主義、及び社會改良主義の如きは、皆この中に入るのである。次にその第二は普通廣義の社會主義であつて、一般に社會上には平等主義を執り、生産上には生産の機關を社會の共用とし、分配を平等ならしめんとする一切の傾向を總稱するのである。此の意義では共產主義 (Communism) を初めとし、無政府主義 (Anarchism) 虚無主義 (Nihilism) 等の危險的主義は此の中に包含せしめて差支ない。それから第三は狹義の社會主義で機關 (土地及び資本) の公有、及び分配の上では勞働に對する比例的報

酬の要求を中心とする社會改革の主義を指していふのである。所謂近世科學的社會主義 (Scientific Socialism) 特に獨逸のカールマルクス (Karl Marx) の社會主義が其の中堅となつてゐるのである。彼等は一切の生産的財産をば國家の共有財産となし、且つ生産並に生産の利得の分配をば、一定の計案によりて算出せんとするのであるから、この主義の上より自ら社會民主黨とも稱し、其の制度を社會民主制と言つてゐる。而してこの思想が無政府主義と合したるが佛國のサンヂカリズム (Syndicalism) であつて、政治上産業上に於ける根本的大革命主義とも稱すべき者である。之は更に米國に傳はりて世界産業勞働者 (Industrial worker of the world) となり、通常之を略して I W W と稱してゐる。以上の二者よりも稍々穩和にして且つ組織的なるは英國の國民

的結社 (National guild) である。而して此等は皆勞働問題における勞働者の運動がごうも思ふ様に達せられぬ所から、何とかして政治上にその勢力を得なければならぬ。ごいふやうになつて、遂に社會主義が社會黨 (Social Party) なるものを各國に組織せんとしてゐるのである。以上叙述せし所を通覽するに、普通廣義の社會主義は、社會の一切を破壊せんごするものであるから、是を以て極端なる個人主義ご稱することが最も適當である。殊に社會の實在てふ觀察點から論ずる時には、虛無主義、無政府主義の如きは、全く反社會的、反國家的ごしてごこまでも之を退けねばならぬ。次に共產主義も同じく私有財産廢止の點より見れば、等しく反社會的ごして國民の思想界より驅逐せねばならぬ。而して國家社會主義、社會改良主義の如きはその主義方針

に於ては、社會の改善を、企圖するものである故に、暫く社會主義ごいふ名稱かる之を區別することが必要である。若し夫れ革命を標榜する危険なる社會主義にありては、斷乎ごして之を排除することに努めねばならぬ。

(一) 過激主義 (Bolshevism)

最も近代的なる過激主義は、その起因を露國社會民主黨に求めねばならぬ。元來該民主黨はその政綱ごして、政治的犯人の特赦、死刑廢止、所有土地の徵收、産業運輸の國有等を主張して來たのであるが、其の中には温和の主張をなすものご、急進主義ごがあつて、所謂過激派ごはこの急進主義をいふので、彼等は恒久的革命の可能なることを信じ、武裝的暴動の手段をとり、急激に

革命黨の少數によりて、群集を教唆し、且つ誘惑せんとする秘密團の組織を必要とする者である。而して過激派の主義は、マルクスの社會主義に負ふ所大であるが、急激に革命に邁進せんとするは、寧ろマルクスの主義に一步を進めたものと云ふべきである。富の創造者たる労働者は、重大なる社會力を有してゐる。故に單に無産者の開放を以て充分なるものとなさず、進んでは有産階級をも征服し、政權を完全に掌握せざれば止まずと呼號してゐる。されば今次の世界大戰に於ても、穩和派は大戦を以て專制主義に對する民主主義の争なりと解し、專制主義の打破は社會主義實行の前提なりとじて、戦争の繼續に賛同したるに反し、過激派は有産者に對しては戦争は有益なれども、無産者に對しては不利此上もなきものとして、和戦を極力主張し、レーニ

ントロツキー等の努力に依つて、遂に大正六年大革命を惹起し、ロマノフ王朝の顛覆を謀り、全年十一月に至つて、ケレンスキー内閣を経て、レーニンを總理させる過激派政府を樹立するに至つたのである。これが現今の露國の過激派政府であつて、今その政綱とせるものを見るに、

一、露國は勞兵會の代表者よりなる聯邦國共和國にして、各民族の自由同盟を以て根柢とす。

二、土地私有權は之を廢止す。

三、労働者の力を確立する爲め凡ての工場、鑛山、鐵道を國有とす。

四、銀行を國有とす。

五、經濟生活を秩序的ならしめ、遊民なからしむる爲め強制勞

働の制を布く。

四八

六、労働者の地位を安固にし、反革命を防止する爲め赤衛隊を編成し有産者武装を解除す。

七、秘密外交を排し、非賠償、非併合、民族的自決の民主的媾和を促進す。

ごいふのである。以上の政綱は現に之を自國內に實行するのみならず、此の思想を全世界に傳播せしめんことをも努力してゐる。その宣傳状態は、先づ瑞西に入り、英、佛、伊、獨に傳はり、遙かに大西洋を隔てて、北米に移りて盛んなる活動をつゞけてゐる。されば米國司法當局は、之を以て自國の自由制度に對する忌々しき侵迫なりとして、之が抑壓に全力を盡してゐるの状態である。

次に極東方面は莫斯科に革命煽動養生所を設け、歐米、印度、支那、日本等に過激思想の宣傳をなさしめんとしてゐる。そして昨年十二月一日莫斯科にて開かれたる支那労働者大會にては、支那にも過激的思想宣傳の必要ありと可決し、最近これが秘密結社を組織し、天津、上海を中心として活動を開始したるかの如き説がある。又本年一月には同じく莫斯科にて、支那労働會朝鮮人會を開き、朝鮮内にも過激思想の宣傳の必要があること力説したこの事である。今春の朝鮮暴動事件の裏面、昨今支那の日貨排斥の裏面には、矢張りこの過激思想の勢力が潜んでゐたことも確かである。然して昨夏より駐屯せる我が西伯利亞軍に對しては、あらゆる手段を講じ、荐りに過激思想を注入せんとして、その虚を狙うてゐる旨を最近視察の上、歸朝せる山梨陸軍次

四九

官は物語つてゐる。かくの如く過激主義的思想は意外な所へ、意外な手段を以て、意外な影響を與へてゐるのであるから、歴史的に意義ある我が國家の下に、上下一致して以て光榮ある國民的生活を持續するのが、やがて人類の幸福を享くる所以なることを自覺せる者にありては、須らく「順序一つの理」と「因縁の理」を無視せるこの過激的革命的の思想に對して、猛然として反對運動をさ起さねばならぬ。

(三) 民主主義 (Democratism)

次には最近尤も勢力を占めつゝあるデモクラシーに就いてであるが、今日では學生は勿論、労働者等も縦んばデモクラシーなる言葉は知らないにしても、何處もなく其の空氣に感染して

あるのである。然らば時代思想とはいひ乍らも、斯くも廣く、かくも深く流行しつゝある所謂デモシラシーとは如何なるものであるかといふに、近時我が國に廣く用ひられてゐる所の民主主義といふ言葉は、即ちデモクラチズム (Democratism) の譯語であつて、これを民主政治など云ふ場合にはデモシラシー (democracy) と稱するのである。換言すれば國家及び社會統治の主權が人民にあるこの意となるのである。然るに之を民本主義など譯して民主主義と同一物の如く言ひ觸らす者があるが、元來民本と云ふのは「君は民を以て本とす」といふ皇祖以來の國家統治の大本をさすのであつて、民主主義とは全然意味を異にしてゐる。然し今日の我國で用ひられてゐる民本主義なる語は、民主主義の別名に過ぎないので、兩者の意義を混合して用

ひられてゐることを知らねばならぬ。

今このデモクラシーなる言語の起原について調べて見ると、三千年の昔から西洋には既に存在してゐたのである。即ちデモクラシーとは、希臘語のデモス (Demos) 即ち人民なる語と、クラチオ (Kratia) 即ち支配なる語との結合文字であつて、人民の支配といふ意味に用ひられてゐたのであるが、時代の變遷と共にその内容次第に變化して、今日では、大略政治的民主主義、産業的民主主義、社會的民主主義など云ふやうに分類せられてある。今その内容に就いて一二を説明すれば、道德上のデモクラシーといふのは、人間を自由的存在と見ると共に、また犯罪の價値体として取扱ふのである。即ち何人をも權利の主体であると共に、義務の主体と見るので、人格價値の差別以外には、凡ゆる差別

や階級を打破しようといふのである。次に教育上のデモクラシーといふのは、萬人をして平等に天賦の能力を出来る丈け完全に發達せしめ、萬人に教育の恩恵を平等に受けさせようとするのであつて、此の見地から各種の教育的設備を完成し、且つ萬人をしてその性能、境遇に適する學校に就いて、最も有効なる教育を受けしめ、之に要する費用は國家が負擔する事を以て常態とするのである。此の外特種の教育機關、殊に低能兒、病弱兒、貧兒等は勿論、女子に至るまでの凡ゆる弱者に適應する教育機關を完備する事に力を盡すのである。之の意味に於て教育上の民主主義は教育上の機會均等、教育上の平等主義と見る事が出来る。次に藝術上の民主主義とは、一般民衆の生活を藝術的に高めようとする主義であつて、その題材も亦彼等自身の人格、生活、事件

等最も密接なる關係を有する者の中から撰拔し、あらゆる方面に於て、その規模を出来る丈け廣大にして、又出来る丈け多くの民衆に接近せしめんとするので、即ち在來の如き特權階級のみが、藝術の恩惠を獨占する弊風を打破して、あらゆる人々にその恩惠を均霑せしめようとするのである。次に哲學上の民主主義とは、單に少數特權階級の論理的要求にのみ、満足を與ふることを目的とする講壇主義に反して、多數民衆の實際的要求に満足を與ふるこそが、やがて彼等の生活を向上せしむる所以なり。として、その方法手段も、簡明なる用語と、具体的論述と文學的樣式とを用ひて、この目的を達成せしめんとするのをその特色とするものである。更に經濟上の民主主義とは、經濟的價值即ち富の生産分配に於て、一部特權階級乃至不當なる利益の隴斷者

を抑壓して、機會均等を計り、以て多數民衆の經濟的幸褔を保護し、増進しようといふのである。此の點に於ては前述せし社會主義と能く似てゐるが、その基礎を人格主義におく點が大なる相違である。それから政治上の民主主義は、自律的存在としての人格を尊重して、これを完成し、且つ各人の利益幸福を保護し、増進するを目的とすると共に、民衆の自律性、即ち人格の本性を最も巧みに利用することを以て、此の目的を達成する最良の方法、理想的政治の方法であるとするのである。此の故に政治上の民主主義が常に (Government for People by People, of People) 即ち人民の爲めの政治、人民によつての政治、人民の有する政治なる言葉によりて表示せられる所以である。

而して政治上の民主主義の思想と、經濟上の社會主義の思想

こは次第に混融して、今日に於いては、ソシアリズム(Socialism)といふのも、デモクラチズム(Democratism)といふのも、畢竟事實は一つになつてゐることを注意せねばならぬ。

かくの如くデモクラシーの有する意義は、社會的變遷に伴うて、多面多様となれるも、その中に一貫してゐる思想は、自由(Free dom)の平等(Equality)である。この自由と平等との主張は、強ちに排すべきにあらざれども、苟も「順序一つの理」「互たすけ合ひ」の天理天則に伴はざる場合は、反抗となり、示威的となり、暴擧とあらはれて、社會の平和を攪亂する事多大なれば、大に注意を要すべきである。要するに「天理の往還道」に出でざる間は、是等の主義は猶ほ幾多の迷路に彷徨して、言論上に事實上に多大の困難に遭遇するであらうと思はれる。

五 現代思潮と天理教教理の一端

以上現代思想の三大潮流について、聊か説明と批判を試みたれば、次には順序としてかくの如き現代思想に對して我が天理教の教理は如何なる關係に立つかを略述して見たいと思ふ。さて本教には前生の因縁、今生の因縁といふ大原理が説かれてある。これは「魂の生通」といふ事が基礎となつて、人間は轉生するものなりとし、各轉生中の各人の心事行爲によつて、今世の運命を生ずることするので、これ即ち前生の因縁である。次に此の前世の因縁の上に、今世に積み重ねたる心事行爲の結果を稱して、今生因縁——なすいんねん——と云ひ、此の二つの因縁が集合して、各自現在の境遇なる結果が現はれ來るものとせられ

てある。されば本教の信仰は、此の各自の因縁を、深く自覺し、感謝と喜悅と、之に加ふるに眞實の努力とにより、悪因縁を斷除し、以て其の運命の改造を行ふといふことになるのである。而してこの悪因縁を組成する根源は、教祖は之を「ほしい」「をしい」「かはい」「にくい」「うらみ」「はらだち」「かうまん」「よく」の八埃より生ずるものと教示せられたのである。約言すれば即ち本教の因縁説は、長き人類の過去の間に積み重ねたる各自の善悪因縁の分量に依つて、各個人の境遇は定まつてゐるものとするのであるから、總ての人間は不平等であるべきが、現在の社會に於て當然の結果といはねばならない。その不平等は、各自の心事行爲より來りしものにして、換言すれば過去の因縁に支配せらるゝが故に不自由となり、不平等なるのである。元來元なる神

は、吾等人類に「自由用」の理を與へられたのであるが、人間は又その「自由用」の理の爲めに、反つて悪因縁を積み重ね、これによりて現在の不自由なる境遇となつたので、教祖の説き給ひし「我が身恨みである程に」とはこの義をいふのである。教祖は猶ほ「それ人間といふ身の内といふは皆神のかしもの心一つが我がの理」と教へ給ふた。即ち吾々の肉体は神の奇しき調攝によりて「心一つ」の理に貸し與へられたる者であつて、本來我が有ではないのである。これ本教の所謂「借物の理」にして、「自由用の理」と稱するは上記の「心一つ」の理をいふのである。さればこの「心一つ」の理と「八埃」が、やがて自己の悪因縁を求むることとなり「魂の生通」の理と相俟つて、過去の昔より永劫の未來に向つて、轉生を續けねばならないのである。従つて今日の自己は過去の自

己であり、又未來の我たるべきを知らねばならぬ。要するに貴賤上下の區別は各自が「心一つの理」に求めたる必然的の結果にして、本來絶対のものではないこと勿論である。されど神の慈眼より見給へば、人類としては何等の區別もなく、等しく神の愛子であつて、ごに隔てはないのである。これ神の絶対平等觀である。然れどもこの絶対平等は、彼の主義者が欲する平等でなくして、恰も國家が臣民を遇するに平等となし、父母が子女を愛念するに、何等隔心なきと同様である。然し乍ら物に本末あり、事に終始あり、前後上下の秩序は天地創造の太初より嚴として社會に存して、動かすことを許さない。これ即ち順序の理法にして、本教はこの「順序一つ理」を尊重し、尙ほ因縁の自覺によりて不斷の向上をこれ努め、以て國家社會の進展に資するのである。

る。かゝれば過激なる社會主義極端なる民主主義者の唱ふるが如く、現在の順序——整然たる秩序を破壊して一切を平等たらしめよと主張するが如きものは、全然相容れないのである。更にいへば貴賤、貧富、上下の區別は、各自の因縁より必然的に生じたる順序の理法なるを以て、これを尊重是認するご共に、相互はこの因縁の自覺の下に、一列一体となり、上の者は下の者を愛し、下の者は上を敬ひ、相倚り相扶けて、所謂「たがひたて合ひ」の實踐的教法によりて、相和諧し以て彼此共濟の實を擧げんごするのにある。かゝる時は上の者は益々幸福となり、下の者は自己の惡因縁を斷除せられ、漸次に幸福を享受すべき運命が自然に開拓せられる事となるので、これ即ち天理天則にして、宇宙間の眞理である。されば此の順序の理を尊重する教は、文明國でも

野蠻國でも、又如何なる社會に於ても、如何なる時代に於ても、一定不變の眞理として是認せらるゝは論を俟たざる所である。それから本教に於ては、例へば今日我が國でやかましい労働問題に對しても、労働者が一致團結して、示威的運動の上から、自己の主張を貫徹せしめんとして、資本主に反抗するやうな事は、決して認めないのである。即ち前に説ける因縁の理によりて、資本家も労働者も、各自己の因縁と天分とを自覺し、相共に「はたらき」の實を擧ぐべきことを第一要諦とするのである。細言すれば資本家は労働者を酷使して、恰も生活の支持者たるが如き傲然たる態度を些も示す事なく、自己の營める生産事業は、労働者の労働によりて始めて意義あるものなることを感謝し、眞實にやさしき心より等しく神の子たる労働者の身上借物の理を尊

重し、かくて物質の給與を豊にするばかりではなく、進んで労働者の智徳の開發に努力すべきことを主張するのである。又労働者に就いては、労働そのものは神の掟て給へるまに、あらはれざる神の力を現はし行く、尤も神聖なる淨業の一つであつて、人たるの價値は、神の定められたる職分の道に精勵し、誠意を以て其事に任ること否ことによりて定まることを教へ、然も社會組織の關係上、被傭者の地位に居らねばならぬ境遇に想到して、深く自己の因縁を省み、苟も自暴自棄する事なく、淫逸放縱に流るゝ事なく、不斷の愉快なる活動に安住することを主張するのである。かくして相互に融和し相互に提撕して、「はたらき」の實を擧げんとするに於いては所謂天の與へもかはる事なく「神の恩寵に浴して、開展の光に迎へられる事が出来るのである。而

して茲にいふ「はたらき」は唯に労働者の労働のみを意味するのではなく、資本の提供も、企業も乃至は各人の職業も等しく包含せられたるものなることいふまでもない。何となれば神の御心を顯現すべく、一列の人は、共に神のはたらき手であるからである。

天理教はかくの如く上下の者を救済し、教理を一人一人の精神に刻み込んで行つて、それから漸次に人間社會を改造せんとするのが本教のおたすけ即ち人心救済の本願である。然るに社會主義殊に過激主義などにては、直接に外部から個人の境遇を改革し、以て世界の革命的改造を企圖するのであるから、之れは全く天理に反するものといはねばならぬ。個人の人格を改めず、確乎不動の因縁の理を無視し、多數の力に依頼して、社會國

家に革命を起す位危険な事はないのである。現に露國の如き彼等の所謂理想を斷行して、果して幸福が得られたかといふに、少しも得られてゐないのである。見よレーニンが革命に着手した際、彼は平和、麩麩、土地の三つを國民に與へるを標榜したが、平和どころか、國內争亂絶ゆる時なく、土地の徵收配付は容易でなく、爲めに地主對農民の争鬭を惹起したではないか。加之農民は穀物の不足に伴ひ、播種期に於ても種子なく、農具なく、馬正なく、爲めに耕作不能の状況を呈してゐる。農民の爲めにすると呼號した過激派政府は、必ずしも農民に喜ばれてゐないのである。ヘトログラード大學教授ロストニツク氏は過激派政府を評して、

過激派が政府を握りてより既に一年以上を経過せり、余は彼

の破壊行爲の中にありて、何等かの建設的意義を發見せんご欲せり。然し予は破壊に次ぐに破壊を目撃するのみ、其法律命令は機關新聞紙上に掲載せらるゝに止まりて、政治組織は帝政時代の舊制を繼續し、然も最も腐敗せる官僚政治の繼續なり。地方の農業は破壊せられ、無法なる掠奪によりて、私有財産を横領し、工場には怠惰なる労働者寄生し、僅かに少量の生産をなすに過ぎずして、科學、教育、美術の方面にも何等見るべきものなし。彼等は新文明の創造者に非らず。新社會主義は、世界文明の名の下に破壊を行ふに過ぎず。云々

ごいうてゐるが、俄かに下層階級者が治者階級に列したからごて、決して立派なる政治の行はれやう筈がない。矢張り天理教の如く個人々々の心を改良して、天然自然の道を進んで、漸進

的温和的方法によるに非らざれば、眞に根本の理想に到達し得べきものではない。次にまた社會主義が財産私有制度を禁止する事は、前述の如くであつて、今日に於てもデモクラシーの一面は、此の社會主義ご合同して一切の運動を起してゐるのであるが、この結果にして事實に現はれんか、今日の露國の如き状態ごなり、何の秩序も天然の理法たる順序の理も失せて、アリストートルの所謂獸類生活ご異なる所がなくなるであらう。

それから民主主義、社會主義などにては、多數の人が團結して、革命を行ふごいふのであるが、これごて人類の平和、幸福を害すること頗る大なるものがある。かくの如き方法は、從來に於ては、或は已むを得ずごしても、今後文化の進歩せる世界にあつては、斷じて宜しくないのであつて、いかでかかゝる手段方法を以

てして永久に人類の平和と幸福を得られよう。要は唯だ自己の心理状態を改良して眞實の人となり、その感化を他に及ぼし、かくして漸次に社會の改良を謀るより外に道はないのである。我が天理教の世界救済の本領は實に此に存するのである。而して又今次の國際聯盟には、八時間労働制を採用することになつてゐるから、或は將來の工場労働時間は、これによりて一定せられるかも知れぬ。現に我が鐵道院はこの制度を採用して近々實行せんとしてゐる。これは大に理由の存する所なれど、社會主義者の中にはこの八時間労働もまだ長きに失するごとく、六時間説を唱へ、甚だしきは四時間労働を主張するものさへある。かくては救済にあらざして寧ろ益々墮落せしむる事となるのである。何となれば元來人間の能力、勢力、境遇等は前述の

如く、各人皆異なつてゐるのであるから、因縁のあしき者が、よき因縁の者と同様に徳を積み、同様の努力をなすやうでは、何年何代を経ても因縁の斷除は覺束なく、従つて終生向上する事が出来ない譯である。本教の教理は、先づ谷底の者より救済するを第一義としてゐるのであれば、因縁の悪き者程、多くの努力をなして、向上の道を求めねばならぬこととなるのである。

最後に社會主義は精神的労働を輕蔑して、肉体的労働に重きをおく傾向があるが、これ亦誤つた思想である。その精神的たるは肉体的たるご何れにしても輕重なきが自然であり、神の教である。此の點につき本教には「ひのきしん」なる教理がある爲め、一見肉体的労働を尊重するが如く見ゆれど、決してさうではない。「ひのきしん」の有する内容は多様にして、精神、肉体、物質

の區別なく、金のある者は金を以てし、辯舌の人は辯舌を以てし、筆の人は筆を以てし、勞力の人は勞力を以て、社會國家の爲めに、自己を離れてなす愉快と喜悅との情に溢れたる努力そのものを指すのであつて、隨つて、物質の多寡、結果の遲速、分量の如何を問ふのではなく、その心事の清麗にして誠實なるを尙ぶのである。

七〇

六 結 論

今や世界の大戰は漸く終局を告げ、五十年前獨佛兩國間に奇しき因縁を残したるヴェルサイユの宮殿に於て、世界平和の商議が結ばれた。思へば十九世紀の文明は茲に總決算をなして、世界改造の時機が到來したかの感がある。即ち全世界はこれ

を一轉機ごして、何等かの新しき局面を展開しなければならぬ大勢を示してゐるのである。此の時に當りて、吾等天理教を信奉する者にありては、如何なる覺悟を以て之に向ひ、如何なる態度を以て、如上の大問題を取扱ふべきかに就いては之を略述した。而して又これを本教の發展すべき道程ごして示されたる教祖の豫言に徴して考ふれば、今次の大戦は深き神意の存する所であることを知るのである。されば吾等は先づ第一に我が帝國の地位を嚴かに自覺して、之に處するの道を求めねばならぬ。

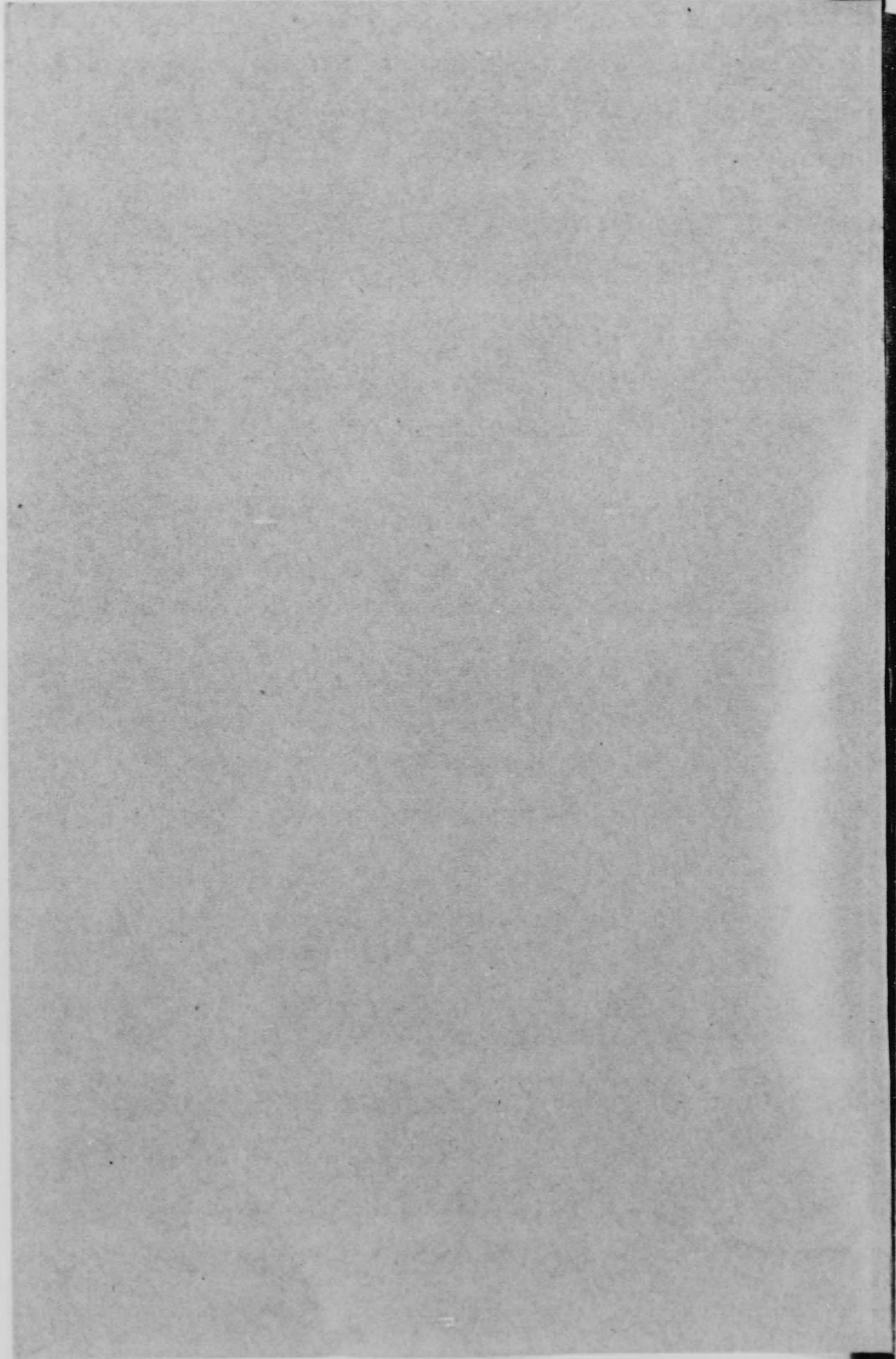
「此の世のほん元なるご云ふのはな、此の所より外にあるまい」
「此の道をどういふ事に思つてゐるこれは日本の一のたからや」
「此の度は月日元へごたちかへり木の根しつかり皆あらはす

ご仰せられた此の天啓言は則ち簡なりご雖も無限無量の教訓ご獎勵ごを吾等に與へられたものごして、大に味ひ大に考ふべきであるご思ふ。而して「日本たすける模様立」の時機は、引續きて、「これから先は日本ばかり」の時代に移らんごする緊急の時なることを示して、吾等に直進の道をお望み下されてあるのである。されば吾等は世界の根元たる我が日本帝國の精華を發揚し、國運の伸張を一意専念に企圖することが、やがて教祖の遺志を全うする所以であつて、同時に又吾等に殘されたる最後の使命であることを痛切に感ずるのである。この故に吾等は日本の健全なる發達を阻害せんごする非國家的の思想、若くは運動に對しては、斷々乎ごして、之を攻撃し之を打破せねばなら

ぬご同時に、國民の生活を危くせんごする誤れる世界不穩の大思想ご戦ひ、神一條の道を以て之が防遏排除に一段の力を用ゐ以て、國民の思想を善導せねばならぬ。さればかくの如くにして立教立國の大精神を遺憾なく發揮し、以て本教ご我が國家ご世界ごの不可分離關係を闡明することが、目下の急務であるご思ふのである。而して猶新しき時代は、啻に「醫者の手あまり」のみに限らず、「政府のてあまり」「社會の手あまり」「工場の手あまり」「富者の手あまり」等一切の世の手あまり者の救済を要求してゐるのであるから、吾等は又天理の正道を準繩ごして、神の教のまに、一列を救済すべく奮然ごして大なるひのきしんご行に出でねばならぬ。かくの如くして邁進する眞實の發露は、「いかほどの強敵あらば出して見よ神の方にはばのいの力や」

763
ご仰せられてあるが如くに、至大絶妙の守護を垂れ給うことはいふまでもない。されば如何に外來の思想、危険なる思想が海の彼方より澎湃として押し寄せ來り、猛烈に火の手を揚げることありごしても、結局はそれがまた愈々天理信仰の眞價と光輝とを發現すべき導火線となりて、やがて合理的、徹底的、穩和的なる本教の教理によつて漸次に眞に世界の平和を來し、又世界人類の改造が自然に行はれるやうになるのであるから、本教の教徒たるものは、此の際に於て益々奮闘努力して、我が國運の發展と、本教の眞理の開現との爲めに、粉骨碎身以て奉公の大義を謁さねばならぬ。

欠



欠

372

282

終